

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

シルクロードの織機

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-11-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 吉本, 忍, 柳, 悦州 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/5212

枠機【IFC-5】

調査年月日	: 1998年9月13日
調査地	: カーナム (Kahnamu) 村
民族名	: アゼルバイジャン (Azerbaijan)
型式	: 傾斜式枠機
材質	: 木, 鉄 (経糸張力調整用ジャッキ)
概寸	: 全高350cm, 全幅500cm
経糸保持方式	: 固定式
整経方式	: 輪状整経式
開口具設置方式	: 開口保持棒可動式

構成部品

機枠	: <図IFC-5-a-1>
経糸保持具	: 上部経糸保持棒 (横木) <図IFC-5-a-2> 下部経糸保持棒 (横木) <図IFC-5-a-3>
経糸間接保持具	: 経糸張力調整用ジャッキ (3本) <図IFC-5-a-4>
開口具	: 開口保持棒 <図IFC-5-a-5>
緯入具	: 板金状緯入具 (太い緯糸用) <写真IFF-4-1-a>と同様
緯打具	: 櫛状緯打具
その他	: 座板 <図IFC-5-a-6>

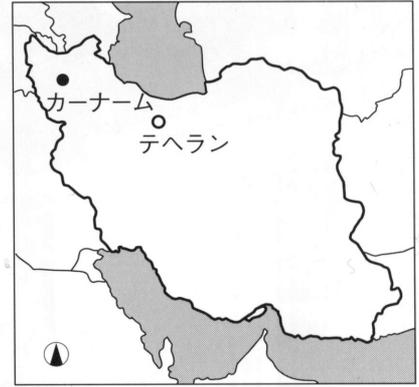
製織中の織物

織技法	: パイル織
地組織	: 平織変化組織
素材	: 羊毛, 絹
用途	: カーペット
経糸全長	: 600cm (全周)
織幅	: 400cm

織り手 : 男性3人

調査メモ

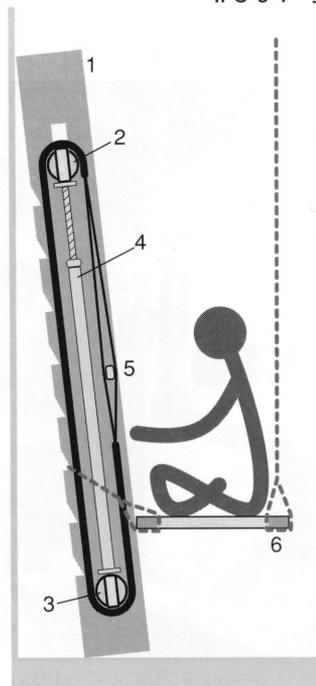
枠機は住居室内の壁際の床に設置され、織り手は座板に座って機織りをしていた。上部経糸保持棒と下部経糸保持棒のあいだには、ジャッキ状の経糸張力調整用ネジ金具が3本取り付けられており、上部経糸保持棒の高さを変えて張力を調整する仕掛けとなっている。開口具としては開口保持棒があるのみで、



その設置方式は可動式であるが、経糸の実際の開口操作では、開口保持棒はほとんど動かされることはない。この枠機の機織りには、太い緯糸と細い緯糸が使われており、これらの緯糸を使用した機織りの操作については、先に提示した枠機【IFF-4】の場合と同様である。なお、パイル織の糸の結びは、トルコ結びであった。また、この家の枠機には、1970年頃までは固定式の輪状綜絢が使われていたという。



IFC-5-1 全景



IFC-5-a 構造図

枠機【IFC-6】

調査年月日 : 1998年9月15日
 調査地 : ヨルゴナガイ (Yolgounagaj) 村
 民族名 : トルクメン (Turkmen)

型式 : 傾斜式枠機
 材質 : 木, 鉄 (経糸張力調整用ネジ金具)
 概寸 : 全高132cm, 全幅123cm
 経糸保持方式 : 固定式
 整経方式 : 輪状整経式
 開口具設置方式 : 綜統固定・開口保持棒可動式

構成部品

機枠 : <図IFC-6-a-1>
 経糸保持具 : 上部経糸保持棒 (横木)
 <図IFC-6-a-2>
 下部経糸保持棒 (横木)
 <図IFC-6-a-3>
 経糸間接保持具 : 経糸張力調整用ネジ金具
 (2本) <図IFC-6-a-4>
 開口具 : 輪状綜統<図IFC-6-a-5>
 開口保持棒<図IFC-6-a-6>
 綜統固定具 : 木片 (2個) <図IFC-6-a-7>
 緯打具 : 針状緯打具<写真 IFC-6-2-a>
 櫛状緯打具<写真 IFC-6-2-b>
 緯打補助具 : 緯糸打ち締め糸
 その他 : 座板, パイル糸切断用ナイフ,
 櫛<写真 IFC-6-1>, 鉗

製織中の織物

織技法 : パイル織
 地組織 : 平織変化組織
 素材 : 羊毛
 用途 : カーペット
 経糸全長 : 240cm (全周)
 織幅 : 90cm

織り手 : 女性1人

調査メモ

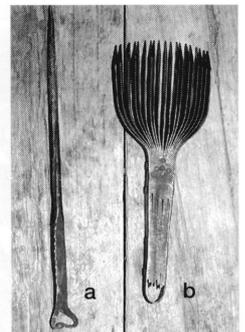
枠機は、住居の土間の壁に立てかけられており、機織りは、座板に腰掛けておこなわれていた。上部経糸保持棒の両端は、機枠の左右の棒に穿たれた穴に差し込まれている。この穴の内部には、経糸張力調



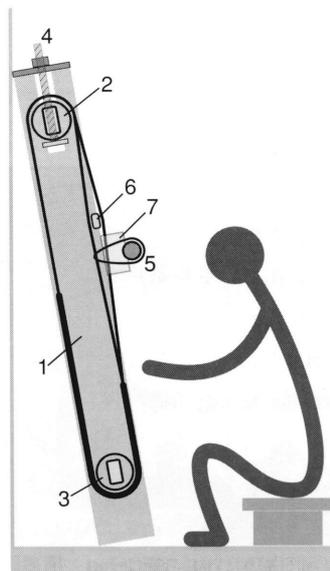
整用ネジ金具として、ボルトが上部経糸保持棒に取り付けられており、機枠の棒の上部の穴を貫通して、ナットで締め付けられている。この枠機による機織りでは、太い緯糸と細い緯糸が使われていた。開口保持棒を下に移動させた状態で、開口部に太い緯糸を通し、櫛状緯打具で打ち込んでから開口保持棒を上を移動し、経糸を手で押しながら逆開口部に細い緯糸が通される。その後細い緯糸が、針状の緯打具でゆるめに打ち込まれ、開口保持棒を下に移動させたのちに、開口部に緯糸打ち締め糸を入れて、櫛状緯打具で強く打ち込まれる。なお、パイル織の糸の結びはトルコ結びであった。



IFC-6-1 櫛でパイル糸を揃える



IFC-6-2 針状緯打具-a
櫛状緯打具-b



IFC-6-a 構造図

枠機【IFC-7】

調査年月日	: 1998年9月28日
調査地	: マシュハド (Mashhad) 市
民族名	: ペルシア (Persia)
型式	: 傾斜式枠機
材質	: 木, 鉄 (経糸張力調整用ジャッキ)
概寸	: データなし
経糸保持方式	: 固定式
整経方式	: 輪状整経式
開口具設置方式	: 開口保持棒可動式

構成部品

機枠	: <図IFC-7-a-1>
経糸保持具	: 上部経糸保持棒 (横木) <図IFC-7-a-2> 下部経糸保持棒 (横木) <図IFC-7-a-3>
経糸間接保持具	: 経糸張力調整用ジャッキ (4本) <図IFC-7-a-4>
開口具	: 開口保持棒<図IFC-7-a-5>
緯入具	: 板金状緯入具 (太い緯糸用) <写真IFF-4-1-a>と同様
緯打具	: 櫛状緯打具<写真IFC-7-4-a>
経糸整列具	: 輪状綜統型経糸整列具 <図IFC-7-a-6>
その他	: 座板<図IFC-7-a-7> パイル糸打ち込み具 <写真IFC-7-4-b> パイル糸切断用ナイフ <写真IFC-7-4-c>

製織中の織物

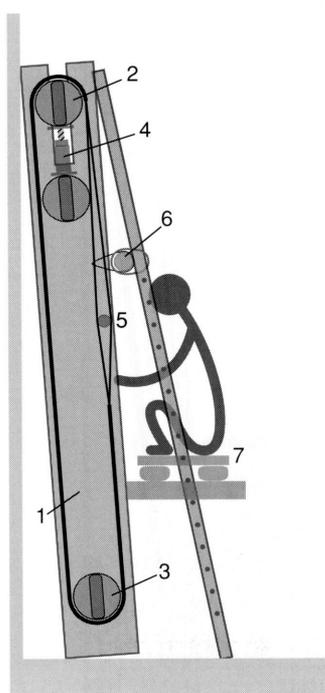
織技法	: パイル織
地組織	: 平織変化組織
素材	: 羊毛 (経糸) 絹 (緯糸, パイル糸)
用途	: カーペット
経糸全長	: 600cm
織幅	: 300cm
織り手	: 男1人



調査メモ

この枠機<写真IFC-7-1>は、シーア派総本山直営の大規模なカーペット工場 (Asjone Ouods Razavi Procurment Producing Carpet Company) で使用されていた。機織りには350人が従事しており、男女の割合は2:1で、男女別々の棟で機織り作業がおこなわれていた。ここで織られたカーペットはおもにモスクで使用される。枠機のサイズは大小さまざまであるが、構造は基本的に同様のものではあった。機織りは機枠の前に渡した板の上に座っておこなわれており、座板は機織りの状況に応じて高さが調整されていた。上部経糸保持棒と、そのすぐ下に渡された横棒とのあいだには4本のジャッキが取り付けられており、上部経糸保持具の高さを変えて張力を調整する仕掛けとなっている。開口具としては、開口保持棒があるだけで、輪状綜統と見える部品<図IFC-7-a-6>は輪状綜統型経糸整列具として機能して

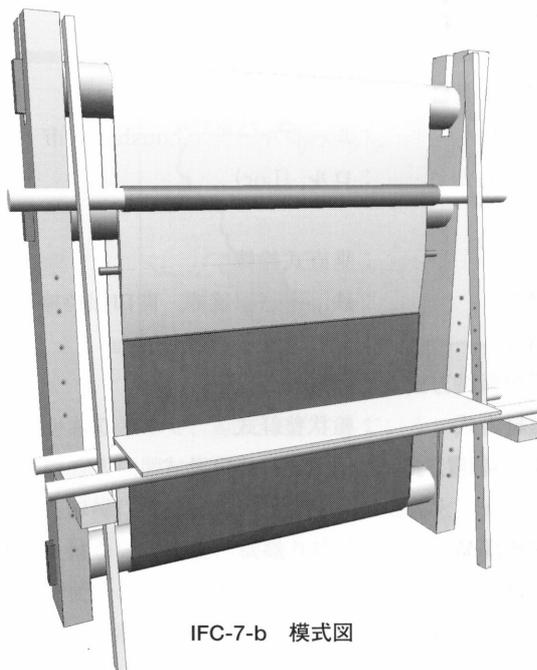
いる。開口具の設置方式は開口保持棒可動式であるが、経糸の実際の開口操作では、開口保持棒はほとんど動かされることはない。この枠機の機織りには、太い緯糸と細い緯糸が使われており、これらの緯糸を使用した機織りの操作については、先に提示した枠機【IFF-4】の場合と同様である。なお、パイル織の糸の結びは7割程度のカーペットがペルシャ結びで、その他はトルコ結びであるということであったが、この機はペルシャ結びであった。



IFC-7-a 構造図



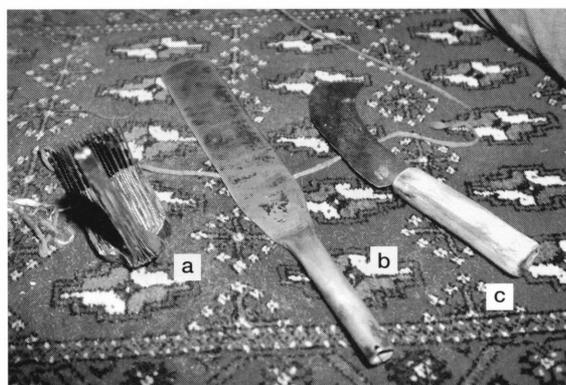
IFC-7-1 全景



IFC-7-b 模式図



IFC-7-2 パイル糸の打ち込み



IFC-7-4 緯打具-a, パイル糸打ち込み具-b, ナイフ-c



IFC-7-3 側面



IFC-7-5 同じ工場にあった大型の枠機

枠機【IFC-8】

調査年月日 : 1998年9月9日
 調査地 : ルーシャーン (Loushan) 市
 民族名 : ロル (Lor)

型式 : 垂直式枠機
 材質 : 鉄, 木 (綜統棒, 開口保持棒)
 概寸 : 全高140cm, 全幅125cm
 経糸保持方式 : 固定式
 整経方式 : 輪状整経式
 開口具設置方式 : 開口保持棒可動式

構成部品

機枠 : <図IFC-8-a-1>
 経糸保持具 : 上部経糸保持棒 (横木)
 <図IFC-8-a-2>
 下部経糸保持棒 (横木)
 <図IFC-8-a-3>
 経糸間接保持具 : 経糸張力調整用ネジ金具
 (2本) <図IFC-8-a-4>
 開口具 : 開口保持棒 <図IFC-8-a-5>
 綜統固定具 : 機枠 <図IFC-8-a-1>
 緯入具 : 板金状緯入具 (太い緯糸用)
 <写真IFF-4-1-a>と同様
 緯打具 : 櫛状緯打具
 <写真IFF-6-2-a>と同様
 経糸整列具 : 輪状綜統型経糸整列具
 <図IFC-8-a-6>
 その他 : パイル糸切断用ナイフ

製織中の織物

織技法 : パイル織
 地組織 : 平織変化組織
 素材 : 羊毛
 用途 : カーペット
 経糸全長 : 202cm (全周)
 織幅 : 63cm

織り手 : 女性1人

調査メモ

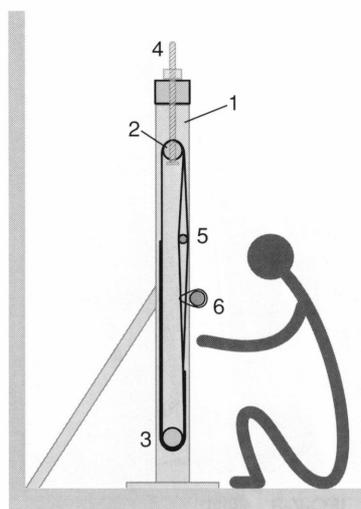
この枠機では、上部経糸保持棒の両端に、経糸の張力調整用のネジ金具として、ボルトが取り付けられており、機枠上部の横棒に貫通したボルトをナット



で締めて、経糸の張力が調整されている。開口具としては開口保持棒があるだけで、輪状綜統と見える部品<図IFC-8-6>は、輪状綜統型経糸整列具として機能している。開口保持棒の設置方式は開口保持棒可動式であるが、経糸の実際の開口操作では、開口保持棒はほとんど動かされることはない。この枠機の機織りには、太い緯糸と細い緯糸が使われており、これらの緯糸を使用した機織りの操作については、先に提示した枠機【IFF-4】の場合と同様である。なお、パイル織の糸の結びはトルコ結びであった。



IFC-8-1 全景



IFC-8 構造図

枠機【IFC-9】

調査年月日 : 1998年9月14日
 調査地 : アフタパ (Akhtapah) 村
 民族名 : クルド (Kurd)

型式 : 傾斜式枠機
 材質 : 木, 鉄 (経糸張力調整用ジャッキ)
 概寸 : 全高350cm, 全幅500cm
 経糸保持方式 : 固定式
 整経方式 : 輪状整経式
 開口具設置方式 : 開口保持棒可動式

構成部品

機枠 : <図IFC-9-a-1>
 経糸保持具 : 上部経糸保持棒 (横木)
 <図IFC-9-a-2>
 下部経糸保持棒 (横木)
 <図IFC-9-a-3>
 経糸間接保持具 : 経糸張力調整用ジャッキ
 (4本) <図IFC-9-a-4>
 開口具 : 開口保持棒<図IIFC-9-a-5>
 緯入具 : 板金状緯入具
 <写真IFF-4-1-a>と同様
 緯打具 : 櫛状緯打具
 <写真IFF-4-1-d>と同様
 開口部記憶紐 : <図IIFC-9-a-6>

製織中の織物

織技法 : パイル織
 地組織 : 平織変化組織
 素材 : 羊毛
 用途 : カーペット
 経糸全長 : 600cm (全周)
 織幅 : 400cm

織り手 : 女性3人, 男性1人

調査メモ

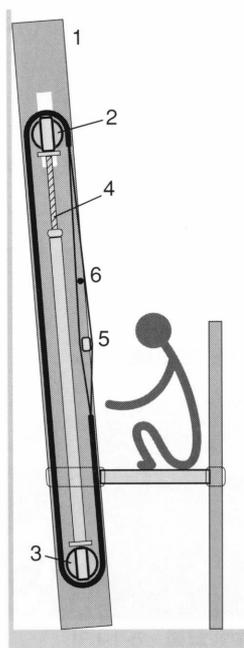
枠機は住居室内の壁際の床に設置されており、4人の織り手は枠機の前に渡された厚い板の上に座って、機織りをしていた。上部経糸保持棒と下部経糸保持棒のあいだには、経糸の張力調整用ジャッキが4本あり、上部経糸保持棒の高さを変えて張力を調整する仕掛けとなっている。開口具としては開口保



持棒があるのみで、綜統は存在していない。開口具の設置方式は開口保持棒可動式であるが、経糸の実際の開口操作では、開口保持棒はほとんど動かされることはない。また、機織りには、太い緯糸と細い緯糸が使われている。これらの緯糸を使用した機織りの操作については、先に提示した枠機【IFF-4】の場合とはほぼ同様であるが、この枠機では、太い緯糸が3回通された後に、細い緯糸が1回の割合で通されていた。パイル織の糸の結びはトルコ結びであった。



IFC-9-1 全景



IFC-9-a 構造図

杵機【IFJ-1】

調査年月日 : 1998年9月15日
 調査地 : タパマフマディ
 (Tapahmahmmady) 村
 民族名 : クルド (Kurd)
 型式 : 傾斜式杵機
 材質 : 鉄
 木
 (綜統棒, 開口保持棒, 経糸中継棒)

概寸 : 全高164cm, 全幅139cm
 経糸保持方式 : 固定式
 整経方式 : 擬似輪状整経式
 開口具設置方式 : 綜統固定・開口保持棒可動式

構成部品

機杵 : <図IFJ-1-a-1>
 経糸保持具 : 上部経糸保持棒 (横木)
 <図IFJ-1-a-2>
 下部経糸保持棒 (横木)
 <図IFJ-1-a-3>
 経糸間接保持具 : 経糸張力調整用ネジ金具
 (2本) <図IFJ-1-a-4>
 経糸中継棒 : <図IFJ-12-a-5>
 開口具 : 輪状綜統<図IFJ-1-a-6>
 開口保持棒<図IFJ-1-a-7>
 綜統固定具 : 把手状固定具 (2本)
 <図IFJ-1-a-8>
 緯打具 : 櫛状緯打具<写真IFJ-1-1-b, c>
 その他 : パイル糸切断用ナイフ
 <写真IFJ-1-1-a>
 櫛<写真IFJ-1-1-d>
 鋏<写真IFJ-1-1-e>

製織中の織物

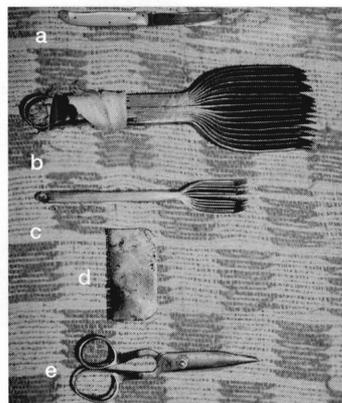
織技法 : パイル織
 地組織 : 平織変化組織
 素材 : 羊毛
 用途 : カーペット
 経糸全長 : 290cm (全周)
 織幅 : 82cm

織り手 : 女性2人

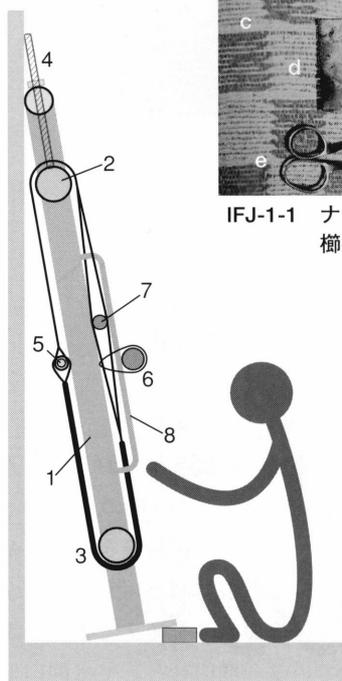


調査メモ

この杵機は、住居室内の壁に立てかけられており、機織りは床に座っておこなわれていた。上部経糸保持棒の両端には、経糸張力調整用ネジ金具として、ボルトが取り付けられており、機杵上部の横棒を貫通したボルトをナットで締め付けて、経糸の張力が調整されている。開口具の設置方式は、綜統固定・開口保持棒可動式であり、開口保持棒を上下に移動させることによって、経糸の開口と逆開口がおこなわれていた。また、緯糸には、太い緯糸と細い緯糸が使われ、開口部に太い緯糸、逆開口部に細い緯糸が通されていた。パイル織の糸の結びはトルコ結びであった。



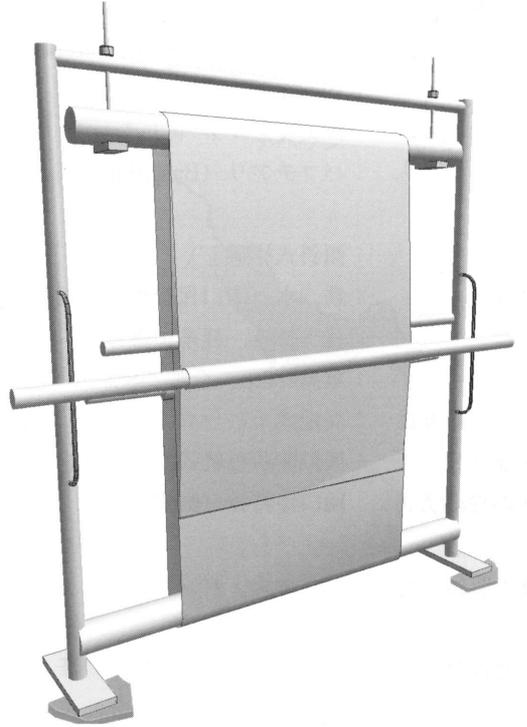
IFJ-1-1 ナイフ-a, 緯打具-b, c, 櫛-d, 鋏-e



IFJ-1-a 構造図



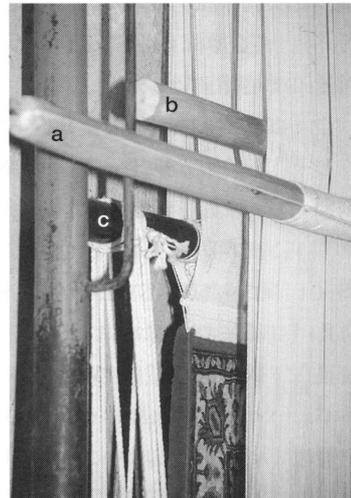
IFJ-1-2 全景



IDJ-1-b 模式図



IFJ-1-3 パイル糸を結ぶ



IFJ-1-4 綜統棒-a, 開口保持棒-b, 経糸中継棒-c



IFJ-1-5 製織途中の織物